

音の三位一体

アイルランドの歌姫エンヤとライアン夫妻

現地インタビュー

enya



[40/0]



山河に抱擁されて創造する至福——それはどんな生き方なのだろう。霧と虹の国アイルランドから、彗星のようにあらわれた女性歌手エンヤは、ひとつの理想を体現しているように思える。エンヤは88年秋の「オリノコ・フロア」で欧州のみならず、東京のリスナーも魅了した。アイルランド北西の生地ドネガルの言葉は、いまだに欧州古代民族ケルト系（ゲール語）である。いわば、失われた楽園の住人なのだ。

シヨーヒビジネスの雑音から離れ、スタジオから悠久のサウンドを発しつづける彼女は、実はソロコであってソロコではない。聖なる三位一体ともいふべき3人の小さな音楽共同体なのだ。マネジャー兼プロデューサーのニッキー・ライアンは冗談好きだが神経が細かく、エンヤの音づくりに深くかかわる。その妻ローマは、博識で作詞を一手に引き受けるかたわら、ふたりの子の母でもある。この夫婦に支えられたエンヤは、白蒼の顔だちのせいも、ユニセックス的存在だった。

ふと思った。エンヤは豊穡なのだ。3人で宇宙に浮遊する透明な「音のユートピア」を形づくろうとしている。新アルバム制作に没頭するさなか、その音楽の秘密と、ヴェールに包まれた生活の一端を聞いてみた。

エンヤ 本名エニヤ・ニ・ブレナン。

BBC(英国国营放送)のテレビ番組「ケルト」の音楽を担当。
渾んだサウンドでスターダムへ。日本でもNHKがこの番組を放映、
たちまち若者の心を魅了した。

彼女の歌は英語やラテン語のほか、半分はケルト系のゲール語を歌詞にしている。

郷里のグウィドールはダブリンから北へ車で6時間のところ。

父親のリオ・ブレナン氏はここでパブを経営。

エンヤの妹らもときに交えて、アコーディオンをひきながら歌っている。

音楽の源は生まれながら内部に

——エンヤ、あなたの音楽の源はなんですか。

〔エンヤ〕私が作曲家に生まれたのは、主のみどころよ。どこからアイデアが生まれるかわからない。ローマが歌詞を書いたり、タイトルをつけたり、素敵な言葉やテーマをみつけたりしてくるけど、私は音楽をつくって、演奏する役なの。でも、音楽のアイデアはひとりではなく3人の合作だわ。

ニッキーの音楽の源はビートルズね。私はゲール語地域の出身だから、アイルランドの伝統音楽をたくさん聴いて育ったの。クラシック音楽を勉強したのは、大きくなってからよ。ローマは音楽に、私と別の愛情を抱いている。それが私たちの音楽にどんな影響を及ぼしたかはいわく言い難いけれど、いつてみればコンビネーションなのよ。

〔ニッキー〕そう、僕がいつもまもってきたコンビネーションだ。3人組がもたらすマジックなんだよ。年齢も違えば、出身地も違う3人だ。僕が首都ダブリンだし、ローマは(北アイルランドの)ベルファストだしね。こいつは完璧なトライアングルなんだ。僕はいつもこの3人組を信じている。なにかを創作しようとして、とりわけ音楽を創造しようとして、3人が集まれば不思議なマジックが起きるのさ。

僕は長いあいだ、音楽ビジネスに携わってきた。でも、僕のころの奥にあるものを表現する機会には恵まれなかった。僕は歌えないし、演奏もできない。だけど、エンヤを通してエンヤの内にあるわすこととはできる。ローマも同じさ。

〔ローマ〕ニッキーは言葉の音をとて大切にす。豊な女学校で働いたことがあるの。そのころから「音」に興味があったのよ。大きなベースを自作して、人の足音や小鳥の声などいろいろな音をだしては、女生徒にさわらせてたんですって。

私は言葉の意味に重きをおくわ。3人がハーモニーを奏でるまでは、試行錯誤なの。

〔ニッキー〕音楽の源は生まれながら、つねに内部に流れていると思う。僕らが生まれる以前からそこにあつたのだ。

僕は伝統音楽のグループいくつかと組んで仕事をしてきた。いいグループだったよ。4人のミュージシャンが演奏するんだ。どのひとりも、立派なソロアーティストになれる。だって伝統音楽は複数のミュージシャンが演奏するものじゃないからね。伝統音楽はつねに独奏だった。あとで発展して合奏するようになったんだ。大飢饉

は知っているかい。

——1840年代の大飢饉(じゃがいも不作に端を発し、アイルランドの人口が半減した飢饉)のこと?

〔ニッキー〕ああ。あの時代、音楽は許されなかった。(英国に)禁じられたんだ。でも、エンヤが生まれたドネガル州は人々がとても音楽を愛していた。禁じられても、調べを奏でずにはいられたかった。楽器がなければ、歌を歌えばいい。言葉のかわりに、音楽を口にしたんだ。ドネガルでは、伝統はしっかり根を張っている。

〔エンヤ〕私はゲール語を喋りながら育ったでしょう。それはけつして失うことのないなにかなの。家ではまだゲール語を使っていると思うわ。だから、私が家のことを考えるとき、いつもゲール語なのよ。世界を旅するようになるまで、気がつかなかった。こんなにもこの文化を愛していたなんてね。でもこの国にいたら、意識しないわ。人々は故郷に住んでいるかぎり、いつか出て、また帰ってこなければならぬ。そして発見するのよ。

〔ニッキー〕そう、故郷がなにかを確かめるために、ひとは出ていかなきゃならない。

〔エンヤ〕そうなの。その発見が私にも起きたのよ。帰郷してこの国を強烈に感じたわ。

〔ニッキー〕いい話だ。僕らは言葉を誇りにしている。政治的にじゃないよ……僕はエンヤみたいにゲール語を喋れない。喋りたいのはやまやまだが、そうはいかない。でも、愛しているんだ。方言はたくさんある。僕が愛しているのはひとつ。ドネガルの方言だ。ほかの方言は僕にとって生きていないんだ。(外国語の)授業みたいなものさ。ゲール語の音声学にすぎない。

マリリン・モンローの最後の家から

——音楽はどんなふうに誕生するのですか。

〔エンヤ〕いつもは私がメロディーを思い浮かべて、それをローマ



なだらかな丘陵には石積みの囲いが網の目のように伸び、白壁の家が点在している(エンヤの故郷・グウィドールで)

いちめん泥炭におおわれた「ボグ」と呼ばれる荒地(グウィドール郊外)



に聴かせるの。はじめ私はメロディーばかり書いている。歌は書かないし、注文もしない。すると、歌詞が欲しくなる。ローマは音楽を鋭く感じとるわ。最初の音符から音楽が育っていくのをみつめている。私が歌っていたがついているものを強く感じとって、ローマが歌詞を書くの。

【ローマ】聴いてすぐイメージが閃くこともあるけれど、ごく稀れだね。3人がほんとうに納得するまでやり直して、エンヤのメロディーがまるつきり違ったものになったこともあったわ。だから、時間的な制約のあるレコード会社などに了解をとるのが大変。でも、信念さえあれば、必ず納得してもらえらわ。

【ニッキー】歌ができるいい例がある。Cursum Peritico(旅は終わる)だ。

——初アルバム「ウォーターマーク」の曲ですね。あれはラテン語でしょう。日本版のライナーノーツはゲール語と間違っていたけど。でも歌詞の後書は不思議だった。マリリン・モンローの最後の家から想を得たそうですが。

【ローマ】偶然テレビをつけていたら、モンローのドキュメンタリー番組だったの。とりたてて興味があったわけじゃない。ところがリポーターがモンローの最後の家のドアの外で、石に刻まれた言葉を見て、これは何かと聞いたのよ。それがCursum peritico、ラテン語で「旅は終わる」という意味だった。「これだ」と思ったわ。

【ニッキー】ローマはできていた曲に早速それを使った。以前からその曲はラテン語の歌詞がいいと考えていたんだ。どういう意味かって？ わからない。ローマがたまたま見て歌詞を書いた。それで十分さ。

【ローマ】ちょうどエンヤがモンローの伝記を読んでいたの。興味があったのね。エンヤも同じ言葉が気になっていた。モンローはその家を買ってから、わずか3週間後に自殺したのよ。それを思うと、偶然とは言えないでしょう。エンヤと私の意見がぴったり合って、タイトルになり、歌詞にもなったのよ。

【ニッキー】逆にメロディーから生まれたアイデアもあった。Sine oíum... (私の思い) だったつけ。

【エンヤ】覚えてるわ。
【ニッキー】僕は知っていたんだ。エンヤは死んだ祖父をとても愛していた。だから、助言したのさ。その歌は祖父の歌にするのがいいってね。ローマがまず(英語で)歌詞をあわせた。ゲール語地域に住んでいた祖父の歌なんだから、ゲール語にすべきだろう。そこで歌詞をエンヤが翻訳したんだ。ほんとうは翻訳じゃない。なんて言ったらいい？

【エンヤ】翻訳は難しいわ。だから、創作したの。

【ニッキー】僕らが外部の影響を遮断するのは、とても重要なことなんだ。ときどきだれかに聞きたくなるよ。「僕らはどうすればいい」ってね。でも避けるんだ。いったん、だれかよその連中のところに持ちこんだら、そっちに染まってしまふ。もう、トライアングルじゃなくなるんだ。

——3人が喧嘩することはないんですか。

【エンヤ】あるわ。私たちがいがみあったり、喧嘩するときって、必ず音楽に問題があるときなの。知らぬまに、よその感化が音楽にのびこんでくる。だから言い合って喧嘩するの。空気を入れ換えるようなものだわ。なにが問題か突きとめられるもの。

【ニッキー】たいしては僕とエンヤが喧嘩するんだ。ローマは完成に近づいてから加わるから、まあ、仲裁役だな。ローマが割って入って、「わかったわ。気を楽になさい。世界が終わったわけじゃない」ってたしなめる。嵐が静まるときも、静まらないときもあるさ。でも、僕は前進する。で、いいアイデアをみつける。いつもバラ色と言えば嘘になるな。ときにはお先まっ暗だ。しげ模様のお天気みたいなものなんだ。

カダファイ大佐にほめられる

最大のヒットになった「オリノコ・フロー」の歌について聞かせてください。

【ニッキー】あれはThe Bosses(漕ぎだせ)が中心の歌詞なんだ。なぜオリノコ河なのですか。

【エンヤ】あの歌ははじめコーラスだったの。私が口ずさみながら、音を創ろうとしていたら、それがThe Bossesって聞こえたのよ。ロ

ダン・エンガスの断崖のそばに積み石があちこちに見られる(アラン諸島・イニシュモア島)



enya



ローマが「コーラスにしましょう」と提案してくれた。それから歌詞をこしらえたの。ローマが「これは強烈だわ、世界中から漕ぎ出す歌じゃないの」と言い出した。私たちも賛成したわ。ローマが歌のなかで訪れたいちばん印象の強い場所がオリノコだった。だから、題を「オリノコ・フロア」にしたの。でも、本質は楽しい歌よ。

——大西洋を航海したアイルランド中世の聖人ブレンダンの伝説を連想しますが。

「ニッキー」航海を念頭に浮かべていたのは確かだけど、そんな連想があったかどうかは疑わしいな。音楽は度が過ぎると感傷的になるからね。(リビアの)カダフィ大佐が、いい歌詞だと言ったそうだよ(笑)。あの歌はトリポリにもふれているからね。

——あの歌詞は謎です。ロブ・ディケンズや「ロスとそのおまけ」Ross and his dependantsなどの名が出てきますね。

「ニッキー」「ロブ・ディケンズが舵をとる」の歌詞だろ。ロブはレコード会社(WEA/UK)の会長だ。だから、彼が舵をとる。こいつはローマのアイデアだ。「ロスとそのおまけ」つてのはね、ちょっとした(築屋落ちの)言葉遊びなんだ。周辺語島The Dependency Islandsってあるだろ。音楽エンジニアのロス・カラムにも妻がいて、生まれたてのベビーがいたんだ。英語ではベビーは扶養家族dependencyだから、それをひっかけたのさ。

——「オリノコ・フロア」の曲が入ったアルバム「ウォーターマーク」

全体のテーマは旅でしよう?

「エンヤ」そう、「ウォーターマーク」の制作でも、不思議な暗合があったの。曲をつくって、ローマが歌詞を書いて、次に移っていくでしょう。アルバムをまとめるまで、テーマなんて忘れていたけど、いつのまにかテーマが水と旅になっていた。

ほんとうになにかが起きたのだと思う。アルバムを制作しながら、ときどき感じたもの。歌ができてから生まれ、あなたが見て聴いてわかってくれるんだから、これはそれをテーマとしたアルバムなのよ。

「ローマ」英国国营放送(BBC)のドキュメンタリー番組「ケルト」の音楽を担当したときは、ディレクター自身がとても音楽を愛していて、エンヤに対する理解も深かったわね。だから、完全といえるほどの自由をあたえてくれたわ。ドキュメンタリーに音を合わせるのではなく、音楽を自由につくらせてくれて、番組のほうが合わせるという場面もあったわね。だからエンヤらしい音楽が生まれたのよ。ラッキーだった。

「ニッキー」ディレクターは滅びゆくケルトの曲を書いてくれと依頼してきた。民族も滅びかけ、言語も滅び



イヤリングにはケルトの渦の文様が



enya

かけていると思っていたのさ。僕は言ったよ。OK。でも、ゲール語の歌にしなきゃならない、とね。僕は曲にストーリーをつけてた。ディレクターが頼んでもいないことさ。「よみがえるケルト」のストーリーだよ。ディレクターの逆をいったんだ。

僕はケルトを生き返らせたのさ。星へ旅するストーリーだったよ。未来のはなしさ。ケルトが新しい祖国をみつめる旅だね。クレジーだったな。

〔エンヤ〕でも、文化はつねに生きながらえようとするものよ。私たちが感じていることだわ。

〔ニッキー〕ディレクターは万物は減びると考えていたんだ。それを知って、僕はあ然とした。悩んだよ。実をいうと、あの番組は彼の意図とは裏腹になっているんだ。いつか打ち明けてやろうと思うがね。

〔エンヤ〕私はゲール語が今より広がると思わないし、減びかけているとも思わない。海外移民が増えたとしても、私たちはやっぱりゲール語にすがっているでしょう。

〔ニッキー〕レコード会社がなんと注文をつけようと、エンヤのレコードにはいつもゲール語の歌が入るだろうね。でも僕らにできるのはそれだけだ。ひとに「ゲール語を喋りなさい」と強制はできない。もっと自然にいきたいね。伝統や文化はなににごとにつけ、欲するところから生まれるべきなんだ。

ユニークでいたいなら自然に暮らす

——ニッキーはダブリンの下町生まれだけど、ダブリンは好きですか。

〔エンヤ〕いい質問ね。

〔ニッキー〕うーん。郷愁って見方をすれば好きだけどね。とても人なつこくって、よそよそしい顔もある都市だよ。オコンネル橋を渡ると、子供が乞食をしている。僕は不愉快になるね。法王が来訪したとき、街路という街路からあの子供たちを追いかつた。橋から一掃したよ。法王が帰ればまた元の木阿弥。偽善じゃないか。

でも、ダブリンの人々にはたいがい善人だよ。どんな都市にも悪いところがある。それだけのことだ。僕はダブリンが好きだよ。

〔ローマ〕私が生まれたベルファストは「プロテスタントとカソリ

[40/0]

ックの紛争で、ほんとうに楽しいところが少なかった。若いころは週末に女友だちとダブリンへ遊びにいったものよ。ニッキーと出会ったのも、ダブリンの友人宅だった。お互いにひとめ惚れて、ふたりで散歩したわ。そのあたりは小川が流れていて、ロマンチックな風景だった。あれは21歳（日本の成人式にあたる盛大なパーティーをする）になる直前だったわ。

子供のころから本が好きだった。自分では書かなかつたけれど、詩も好きだったわね。百科事典や辞書を繰って、あれこれ読んでみたり、地図もよくながめた。今も妖精の話や庭仕事が好きだし、色彩にも興味がある。暇ができたらぜひ彫刻をやってみたい。

生家のまわりは広々とした野原で、牛を追って遊んだわ。川辺の草を切って「聖ブリジットの十字架」（ワラ細工の十字架）を編んだのが懐かしい。

父も母も音楽家だったの。母はオペラの歌手で、よくツアーにでかけていたわ。台所でもどこでも、家には母の美しい歌声が流れていた。14歳で母を亡くして、進学も女学校であきらめたの。父は今もベルファストに住んでいて、ときどき里帰りするけれど、母の墓地にはつらくて行けない。

妻と母と作詩家のひとり三役は夢中でこなしているわ。7歳の下の娘を車で学校に送ったり……。ニッキーと暮らして大切にしていることは、ユーモア感覚を共有することね。でない、結婚生活が味けないものになるわ。

〔ニッキー〕自分がちよつとユニークでいたいなら、ナイトクラブやなんかは避けたほうがいい。僕は自然にプライベートに暮らしている。音楽制作を楽しんでいるんだ。

エンヤに好きな音楽家を聞いたら、モーツァルトやハイドンを挙げた。しかし、「『魔笛』は嫌い」とはつきり言う。シャンペンを吸りながらニッキーが「インタビュアーが吹っ飛ばんじやうぜ」と奇声を発したくらい、はつきりしたもの言いだつた。

天上の声の歌手も、意思と肉体をもつ。「音のユートピア」はこの地上にあるのだ。

（インタビュアーはジャパン・アイルランド・コネクション 石井浜さんの協力を得て構成した）



（上）アコーディオンを弾きながらバラードを歌うエンヤの父親（グウィドールのバブ「リオズ」で）